

文化

2026.4
第43号



ORIGAMIフェスティバル「ORIGAMI×和文化」の展示

上三川町文化協会

令和七年度の振り返りと 令和八年度に向けて



文化協会会長 戸倉 文夫

令和八年度を迎えるにあたり、七年度に実施した文化協会の事業を振り返ってみたいと存じます。

九月六日、喜楽座による「津軽三味線でつづる日本の唄まつりコンサート」を開催しました。詳しくは四頁をご覧ください。

十月十七日から十九日まで「第六十一回上三川町文化祭」を、今年の上三川町政七十周年記念として実施しました。

今年度は、町政七十周年ということで盛大に実施され、二十四の団体により、各部門でそれぞれ素晴らしい展示・発表がなされました。参加者の数も年々増えてきており、新しい施設で快適な文化祭となりましたが、いきいきプラザの会場が狭

い、二階は行きにくいなど、それに高齢化に伴ってステージへの階段の増設、照明等の要望などまだまだ改善すべき点、検討すべき点も出されましたが、皆様の意見をもとにさらに次年度は、誰もが楽しめ、満足できる文化祭を目指したいと存じます。

また、例年恒例となっている大洗町との交流は今年度も好評でした。上三川町と大洗町のそれぞれ持っている素晴らしい文化を通して、今後も両町の文化の発展に大いに役立てていただくとともに、人的交流もさらに育んでいくことができればさらに文化の幅が広がるものと考えています。

そして、町民の誰もが、関心を持って参加し、楽しめ、さらに自分自身を発揮できる場となり、結果的に町全体の文化が高まるような文化祭になればと思っています。

十一月十八日には、文化協会全体研修会が開催され、川越市を訪れました。江戸時代の香りを色濃く残す、徳川家とゆかりの深い「星野山（せいやさん）喜多院」を訪れ、ガイドさんの丁寧な案内で喜多院の歴史を学び、五百羅漢のユーモアあふれる石像に心を癒されました。また川越祭り会館では見事な山車と川越市民の熱気のある祭りのビデオを鑑賞できました。

お昼には蔵造の街並みを散策しながら、皆様川越名物の料理に舌鼓を打って、大満足で帰路につかれました。

明けて令和八年二月十三日には「第四十九回栃木県文化振興大会」が、大田原市の「那須野が原ハーモニホール」で開催されました。二十六名の方が参加され、振興大会に参加する前に、大田原市にある黒羽温泉に併設してある「農村レストラン ラージヒル」で昼食をとりました。が、出来立てのてんぷらを次々と一人の方が運んでくださり、とても温かみのあるおもてなしを感じさせていただきました。

大会では、県の芸術文化に貢

献のあった方々の表彰の後、大田原、那須の皆様の素晴らしいパフォーマンスを堪能しました。

8ピートにのせた「萩の会」の箏曲や、郷土芸能「大田原小唄」「黒羽小唄」など素晴らしい歌と踊りが披露され、極めつけは「黒羽もちつき唄保存会」の皆様による歌と演奏、ステージ上での実際のもちつき、そして「おかめ」の面をつけた方による会場での餅を配るパフォーマンスには会場が盛り上がりました。

一年の主な行事を振り返ってみましたが、やはり自分たちの芸術、文化に精進しながら他の地域、地区の芸術・文化に接し、また交流することの大切さを感じました。

令和八年度は、令和七年度で得た経験、知識、さらに反省も踏まえ、さらに上三川町文化協会が発展するとともに上三川町の文化力がさらに高まるようお互いに理解しあい、協力しあっていければよいと思っています。

(記 令和八年三月十八日)

文化協会

この一年

定期総会

◎四月十七日（木）

上三川町ORIGAMIプラザにて行いました。

◆文化功労者として西口陽子氏（日本民謡泉松会）、小形則江氏（上三川書道連盟）、奈良岡良介氏（しらさぎ吹奏楽団）を表彰しました。

◆令和六年度事業報告および収入支出決算、令和七年度事業計画および収入支出予算について承認しました。

◆役員の改選について承認しました。

◆会報『文化』第四十二号を発行しました。

なお、今回の改選で尾高康之会長が退任し、新たに戸倉文夫会長が就任しました。尾高さんは四期八年にわたって文化協会へご尽力くださいました。ありがとうございました。



退任した尾高前会長



文化功労者の小形さん、奈良岡さん、西口さん

栃木県文化協会通常総会

◎五月二十七日（火）

とちぎ福祉プラザにて行われました。

第一回役員会

◎五月二十八日（水）

◆大洗町芸術文化祭への参加・芸術文化公演会・全体研修会について協議しました。

第二回役員会

◎九月一日（月）

◆全体研修会の開催・大洗町芸術文化祭への派遣団体・全体研修会について協議しました。

芸術文化公演会

◎九月六日（土）

「津軽三味線でつづる日本の唄まつりコンサート」をORIGAMIプラザ上三川日産ホールで開催し、二百七十四名の来場がありました。（四頁参照）

第六十一回上三川町文化祭

◎十月十七（金）～十九日（日）

文化協会からも多くの団体が

参加しました。大洗町との交流ステージを開催しました。（五・六頁参照）

第四十八回大洗町芸術文化祭

◎十月二十五日（土）

大洗町との交流ステージを開催し、日本民謡泉松会が出演しました。展示交流では、文芸・陶芸・絵手紙作品を展示しました。

全体研修会

◎十一月十八日（火）

会員三十七名が参加し、喜多



大洗町芸術文化祭（民謡部）

院・川越まつり会館を見学し、蔵造りの町並みを散策しました。(七頁参照)

第三回役員会

◎十二月十八日(木)

◆文化功労者の推薦及び表彰規定の改定・会報『文化』の原稿募集・出前授業講座の募集・次年度の主催事業について協議しました。

第四十九回栃木県文化振興大会

◎二月十三日(金)

那須野が原ハーモニホールにて行われ、会員二十六名が参加しました。

生沼家住宅「春の茶会」

◎三月一日(日)

国登録有形文化財生沼家住宅の庭園にある茶室にて、町からの委託を受けて「春の茶会」を開催しました。

呈茶は上三川町茶華道協会の戸倉哲仙先生が行いました。建物内では華道・吊し雛の展示も行いました。

市町文化協会長会議

◎三月三日(火)

とちぎボランティアNPOセンターば・ば・らにて行われました。

第四回役員会

◎三月二十四日(火)

◆役員の一部改選・定期総会・文化功労者表彰について協議しました。



箏曲教室 (本郷中学校)

児童・生徒文化体験子ども教室 文化協会出前授業講座

文化協会では、町内の小中学校の児童・生徒を対象に、文化・

芸術に親しむ機会を提供するため、会員が講師となつて出前

授業講座を開催しています。平成二十八年度からは、町の委託を受けて児童・生徒文化体験子ども教室として実施し、より多くの子ども達に町内の伝統文化を体験してもらいました。

令和七年度は、十教室を実施しました。

◎実施団体

◆上三川町茶華道協会

◆華道教室・茶道教室

◆絵手紙

◆絵手紙教室

◆邦楽伝統芸能継承団 翔

◆箏曲教室

令和七年

◆六月

華道教室 (北小)

◆七月

華道教室 (本郷北小)

◆九月

茶道教室 (本郷小・上三川小)

◆十月

茶道教室 (明治南小)

絵手紙教室 (明治小)

◆十一月

絵手紙教室 (坂上小)

◆十二月

箏曲教室 (本郷中)

令和八年

◆一月

箏曲教室 (明治中)

◆三月

箏曲教室 (上三川中)

文化協会芸術文化公演会 「津軽三味線でつづる 日本の唄まつりコンサート」

日本の唄まつりコンサート

文化協会会長 戸倉 文夫

九月六日、「上三川町文化協会創立五十周年記念・上三川町政七十周年記念 令和七年度上三川町文化協会講演会『津軽三味線でつづる日本の唄まつりコンサート』を盛大に開催しました。

これは県内でただ一つ、町文化協会が、今年度「栃木県文化協会」から「文化のつどい」の事業として選ばれたもので、約三百名近くの町民の皆様が満席の状態で「喜楽座」の素晴らしい津軽三味線と踊りのパフォーマンスを楽しんでいただきました。

日本伝統芸能集団 井坂斗絲 幸社中「喜楽座」は、国内はもとより、海外でも広く演奏活動をしており、その熱気あふれるパワーと華麗な演奏、舞に皆さん感動され、熱狂的な拍手をさされてきました。町民の皆様から、

「また聞きたい」、「もう一度見たい」というお声も多数寄せられており、今後機会があれば、また来町して頂き、華麗なパフォーマンスを披露して頂けたらと思っております。



満員の観客



喜楽座の皆様



出演者のひとり稲見若奈さんは町出身



個展の様子

尾高康之前会長が 個展を開催

三月十八日から二十三日、尾高康之前会長がORIGAMIプラザにて、奥様の真佐子さんと「油彩画と昭和レトロを彫る―尾高康之・真佐子二人展」を開催しました。

康之さんは油絵、真佐子さんは日光彫を展示し、連日多くの方が素晴らしい作品に心を打たれていました。

第六十一回 上三川町文化祭

第六十一回を迎える町文化祭が開催され、文化協会からも多くの団体が参加しました。

ORIGAMIプラザといきいきプラザを会場として、町内の文化団体による祭典が催されました。

開幕式後の公演では、茨城県大洗町との交流ステージを行い、磯節保存会による磯節を披露いただきました。

文化活動の発表の場として、町の文化の祭典に相応しい実りある文化祭となりました。

◎会場

ORIGAMIプラザ

いきいきプラザ

◎会期

十月十七日(金)～十九日(日)

※会員の展示・ステージを中心に掲載。



絵手紙展



ふくべ細工展



写真展



音楽祭 大正琴



歌謡祭



音楽祭 吹奏楽



書道展



文化財展



陶芸絵付け体験



茶道展



大洗町の皆さん



文芸展



大洗町交流ステージ 磯節



大洗町交流体験（貝合わせ）

文化協会全体研修会に参加して

― 時が人を結ぶまち 小江戸川越 ―

文化協会副会長 稲見 敏夫

十一月十八日、会員三十七名の参加を得て全体研修を開催しました。今年は小江戸川越、蔵の町川越として観光客に人気の高い川越市を研修しました。

川越市は、江戸時代は城下町として栄え、現在も多くの史跡があり当時の名残が残っています。

最初に見学したのは喜多院という天台宗の寺院です。江戸時代、火災により多くの建造物が消失したそうですが、徳川家光が川越藩主堀田正盛に復興を命じ多くの建物が今日まで文化財として残り大切に保存されています。

家光の命により江戸城紅葉山より移築した客殿、書院、庫裏などで江戸城建築の一端を垣間見る事ができました。なかでも、春日局化粧の間と伝えられる部屋や徳川家光誕生の部屋が印象

に残りました。境内には語釈羅漢像があり、年限の喜怒哀楽を巧みに表現したものや干支を表現しているものもあり興味深く見学しました。

次に川越まつり会館を見学しました。まつり会館では最初に三面スクリーンの映像でまつりの様子が紹介され、まつりにぎやかさが伝わり、在りし日の川越の繁栄ぶりが目に浮かぶようでした。

川越祭り会館には川越まつりで実際に曳かれる二台の山車が展示してあります。精巧な彫刻により飾られた絢爛豪華な山車の迫力に圧倒されました。

昼食後は自由散策となり江戸時代にタイムスリップしたような蔵造りの町並みを多くの観光客と一緒に歩きながら見学しました。また、人気の高い鐘には往

事を偲ばれることが出来ました。

研修を通して城下町として栄えた川越の繁栄ぶりを想像し後世に文化を継承することの大切さを学びました。



喜多院前で集合写真



川越まつり会館



蔵造りのまちなみ

文化協会加盟団体・役員紹介

令和八年四月一日時点

◆加盟団体紹介

- 文芸部
 - 短歌「虹の会」 九名
 - 俳句会 七名
 - 詩作の会 五名
- 美術部
 - 絵画教室 七名
 - 洋画部 八名
 - 日本画教室「華」 十六名
- 書道部
 - 上三川書道連盟二十名
 - 茶道部・華道部
 - 上三川町茶華道協会 五十名
- 歌謡部
 - 上三川町カラオケ連合会 四十名
- 民謡部
 - (公財)日本民謡泉松会 六名
- 舞踊部
 - 文化協会舞踊部 二十名
 - 郷土芸能部
 - 上郷神社太々神楽保存会 十名
- 手芸部
 - 上町自治会パッチワーク教室 十八名
- 陶芸部
 - 陶芸サロン 二十二名

邦楽部

邦楽伝統芸能継承団 翔 五名

文化財研究部

上三川町文化財研究会 二十六名

囲碁部

上三川囲碁クラブ 八名

コーラス部

上三川少年少女合唱団 三十一名

ふくべ細工部

生きがいサロンふくべの会 七名

大正琴部

上三川町大正琴 琴音会 九名

吹奏楽部

しらさぎ吹奏楽団 二十五名

上三川ハーモニカサークル(さくら) 十二名

工芸部

七宝焼彩の会 八名

写真部

上三川写真クラブ 九名

絵手紙部

絵手紙 二十五名

全二十一専門部

二十五団体

四百四名

◆役員紹介

会長

戸倉 文夫 (茶道部)

副会長

稲見 敏夫 (文化財研究部)

松本 桃代 (華道部)

漆原 幸子 (手芸部)

事務局長

奈良岡 典子 (吹奏楽部)

事務局次長

猪瀬 真喜子 (美術部)

理事

稲葉 喜雄 (ふくべ細工部)

井口 俊雄 (歌謡部)

野沢 充 (文化財研究部)

田中 由紀子 (書道部)

佐藤 紀男 (写真部)

膝附 和美 (美術部)

高橋 道子 (舞踊部)

川俣 崇子 (美術部)

会計

猪瀬 幸子 (工芸部)

大橋 茂夫 (美術部)

会計監査

上野 キミエ (文芸部)

福田 しずか (舞踊部)

顧問

関根 豊

上野 多栄子

尾高 康之

文化協会会員募集

文化協会では、随時会員の募集をしております。会員の皆様方からも興味のある方へのお声がけください。

★入会資格

町内に活動の拠点のある方ならどなたでも入会できます。町内在住でなくても構いません。

★年会費

○正会員

個人 一,〇〇〇円

団体 二,〇〇〇円

二〜十人 二,〇〇〇円

十一〜二十人 三,〇〇〇円

二十一〜三十人 四,〇〇〇円

三十一〜四十人 五,〇〇〇円

五十一人以上 六,〇〇〇円

○賛助会員

五,〇〇〇円以上

★入会すると・・・

○文化協会の行う各種行事への参加や運営へご協力をいただくことができます。

○皆様の活動への補助制度がございます。

会員通信欄

◆上三川町陶芸サロン研修旅行

日程…令和七年五月二十六日(月)

参加人数…十六名

研修場所…松佐陶工房

(茨城県笠間市)

コース…笠間稲荷神社↓松佐陶

工房↓那珂湊魚市場↓

長砂ファーマーズ

松佐陶工房は、百五十年の歴史と二千四百坪の敷地を持ち、広いギャラリーでは六十名以上の作家の作品を展示しているそうです。ろくろ体験や手ひねり、絵付けなどの体験もさせてくれる工房でした。

日ごろ、私達が興味関心のあ
る陶器の展示品に触れ、実際に
ろくろを回転させて作っている
作家さんの作業の様子や、陶工
房に必須の登り窯など拝見して
同じ陶器作りの雰囲気新鮮に
感じ、改めて作品作りへの意欲
を感じてきました。



笠間稲荷神社で集合写真

展示品にも、作り手の感性や
手法が作品に感じられ、個性あ
ふれた一つ一つの作品を見たり、
触れたりしながらの研修は、興
味のあるサロンの皆がそれぞれ
良い刺激を受けたと思います。
那珂湊では、魚メインの料理
にしばし歓談し各々が面白い物も
楽しんできました。

これからも、サロンの皆が元
気に活躍できる陶芸教室の場
で、いろいろな作品作りに挑戦
して生きたいと思っています。

(広報 須田康子)

文芸部 俳句

砂浜を歩く靴音春兆す

一服の渋めのお茶や昼寝覚

恒例の家族ビンゴやお正月

阿部 信子

緑陰の双子の寝息乳母車

食卓が文机となりちちろ虫

初春や来るものは皆福の神

上野 キミエ

母の温もり干柿の宅配便

行く秋や見慣れし家屋解体日

旅立つ友へ愛用のちゃんちゃんこ

海老原 孝代

新緑に目をうばわれし小道かな

参道のぼたん桜やほこらしく

親し友さくら待たずに逝きにけり

白寄 佳子

玄関に注連飾りたる平和かな

縁台に野菜と団子月今宵

吾が干支の羅漢を拝す帰り花

谷田部 シツイ

草紅葉戦場ヶ原を一人じめ

秋夕焼新幹線が突き進む

空つ風庭に見知らぬ葉のありぬ

谷中 秀子

水温む心ほぐれし日差しかな

春炬燵テレビの音も夢の中

先ず妣に初筈を供えけり

山本 裕子

秋晴れや浮かれし風の影踊る

大根は畑の横綱ずつしりと

男体山や乾風指揮する髪在先

荒川 啓子

文芸部 短歌

翡翠の狩の瞬間じつと見る

容易くないか二度の空振り

玄関にチャイムは疎か鍵もなし

無防備なるも汚れなき集落

ばりばりと氷踏みつけたんぼ道

腕白坊主の寒の登校

小林正昭

年賀状ラインスタンブ様変わり

数あるハガキ友の筆跡

例年の一月二日の書きぞめは

般若心経書きて一息

心地よい風に吹かれて散歩する

ノルマ五キ口の橋から橋へ

高木ヒロ子

朝の陽に鏡に映る電灯は

丸く仄かに月かと思う

孫を乗せ部活に通う道の先

遠くに見ゆる富士山美し

千両のそばに白菊咲きおりて

色鮮やかに初春を待つ

進藤利子

今もなお心に残る信濃路の

梓の川の白き小石

年越しの蕎麦を食して新年の

富士上空の天馬夢見る

ピカピカの五円手に取り参拝し

はしゃぐ園児ら三十余人

鈴木喜三郎

花ばなの咲くを夢見て手入れする

体の動く限りと念じ

外壁工事の塗料に少し押され気味

庭のもくせい香り届かず

何の音かとふり仰ぐ空に椋鳥の

大群の過ぐねぐらはいずこ

石和芳子

今年こそ結婚記念日フレンチに

あれもこれも今年の思い出

日暮れから納屋の鈴虫夜中まで

満喫している短い秋を

ミル挽きの朝のレギュラーコーヒーに

ほんわかのおんびり至福のひとつ時

宇梶弘幸

冬空に白きわびすけ通路そめ

和の世界へと安らぐ刻を

ゆず実り風呂に漬物香りよし

五感刺激し自然に感謝

ろう梅と南天活けて手打ち蕎麦

笑顔の一杯飛躍の年へ

鈴木初江

八十歳の声を聞きたる我ら夫婦

何をするにもスローテンポに

「シンフォニー」と病院の名の面白し

院長よほど音楽好きね

弦の音久びさに聞く良い音色

心洗われ気持ちおちつく

高橋路江

夜は花とじて守りし蒲公英の

綿毛めざしぬ夢に見た里

面伏せてゆるき歩みの風の盆

編笠深く微笑のこし

亡き妻の化身か蝶の留まりて

広げし羽は何を語らん

木村一男

文芸部 詩

タイトルロールまで

佐藤 かよ子

喜寿をむかえた

七十七年間 おだやかなストーリーばかりではなかつたはずだ

プロローグからエピローグまで

たくさんの人にかかりあい

喜び 怒り 楽しさ 哀しみ 愛おしさ

様々な心のつかえ 模索

それらが人間として私を肉付け

大きくしてくれた

平坦な道の前ではなかつたはずなのに

ひとつひとつのこぼこを乗り越え

過ぎ去ってしまった

すべての苦しみ 重みは感じない

これからタイトルロールが流れるまで

やさしく 楽しいストーリーを

悔いなく自身で演出して

ステンドグラス

河野 真知子

黄昏と彼誰の空を砕いて

窓に隙間なく嵌め込むの

どんな喜びも悲しみも

私を引き裂けぬように

アネクメーネの底の小屋

訪わぬ稀人のために

蛇苳でジャムを煮て

シエノメレスのタルトを焼きましょう

珪化木のテーブルには

いつかのミルク瓶に春紫苑を活け

香草のお茶を淹れて待ちましょう

罅の入った石板に

蠟石で小説を書きながら

頬杖をつくうちに

窓の外が減ぶまで

もしくは

私が時間に解けるまで

歩幅

野水 忍

絶壁に立つ

歯の奥が カタカタ音を立て

不安を増幅させていく

足元の震えを 抑えながら

この恐れは どこから

なぜ自分はこの

この場所で

通り過ぎた季節を数える

ことしかしてこなかつたのか

若さ故に 遠くを追い求め

若さ故に 荷を背負い

足元の深さを 計りかねて

立ちつくす

飛び越えることも

向こう側に渡る ことも

止めてしまえば

新しい世界が始まらない

遠まわりしても

自分の歩幅で歩いて行けば

新しい景色が見えて

くるのかも知れない